

[成果情報名] **イチゴのヒラズハナアザミウマに対する要防除水準の設定**

[要約] ヒラズハナアザミウマによるイチゴ成熟果の被害果率を 10%以下にするには、開花している 100 花当たりのヒラズハナアザミウマ寄生成虫数が 10~11 頭になった時、または、ヒラズハナアザミウマ成虫の寄生花率が 10%になった時に防除を行うとよい。

[キーワード] イチゴ、ヒラズハナアザミウマ、果実被害、要防除水準

[担当] 香川農試・病害虫担当

[連絡先] 087-889-1121

[区分] 近畿中国四国農業・生産環境（病害虫）

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

イチゴ栽培では、春先からアザミウマ類の発生量が増加し、果実に深刻な被害を与える。しかし、防除の判断基準が明確でないことから、現場ではアザミウマ類防除に苦慮している。そこで、イチゴの花に寄生しているヒラズハナアザミウマ成虫数と果実被害との関係から防除要否を判断するための基準を設定するとともに、それを用いて防除効果を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 開花している 100 花（開花～落弁中）当たりに寄生しているヒラズハナアザミウマ成虫数（X：対数変換値）と成熟果の被害果率（Y：逆正弦変換値）の間には高い正の相関関係が認められる（[図 1](#)）。成熟果の被害果率が 10%となるのは、開花している花に寄生しているヒラズハナアザミウマ成虫数が 100 花当たりで 10~11 頭になった時である。
2. 寄生花率（X：逆正弦変換値）と開花している 100 花当たりのヒラズハナアザミウマ寄生成虫数（Y：対数変換値）との間に高い正の相関関係が認められる（[図 2](#)）。100 花当たりヒラズハナアザミウマ寄生成虫数が 10 頭となるのは寄生花率が約 10%の時である。したがって、寄生花率で 100 花当たりヒラズハナアザミウマ寄生成虫数を推定することも可能である。
3. 以上の結果に基づいて、要防除水準を、開花している 100 花当たりヒラズハナアザミウマ寄生成虫数が 10~11 頭、あるいはヒラズハナアザミウマ成虫の寄生花率を 10%とすることにより、4 月以降のヒラズハナアザミウマによる果実被害の発生を低く抑えることができる（[図 3](#)）。

[成果の活用面・留意点]

1. 栽培様式は高設養液栽培である。
2. 検討した品種は女峰で、アザミウマ類の優占種はヒラズハナアザミウマであるため、女峰以外の品種や、優占種がヒラズハナアザミウマ以外である場合は要防除水準の再設定が必要である。

[具体的データ]

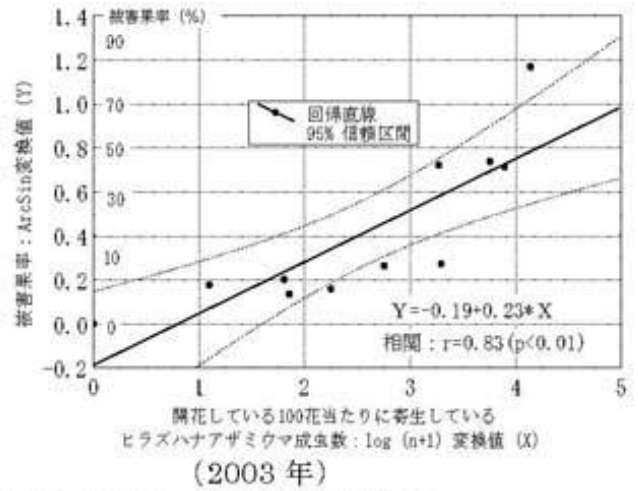
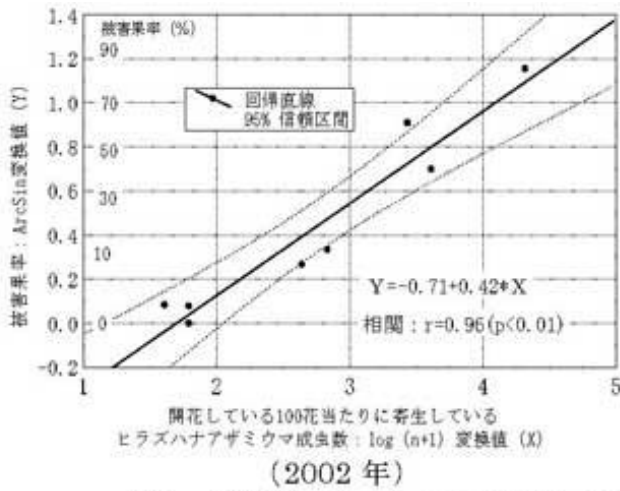


図1 開花している100花当りに寄生しているヒラズハナアザミウマ成虫数と被害果率(成熟果)との関係

- 注1) 開花している任意の100花について、ヒラズハナアザミウマ寄生成虫数を約7日ごとに調査した。
- 注2) 寄生虫数調査時調査したイチゴのがくを油生インクで調査日ごとに色を変えてマークすることにより、成熟果の開花時期を推定した。
- 注3) 被害果率は、全成熟果を肉眼で観察し、果表面の被害の程度によって高品質がないと判断されたものを被害果として計数し算出した。
- 注4) 品種は女峰で、アザミウマ類の優占種はヒラズハナアザミウマ(優占率: 2002年: 76.8%、2003年: 69.5%)であり、これ以外にネギアザミウマの寄生があったが、ミカンキイロアザミウマの寄生は認められなかった。

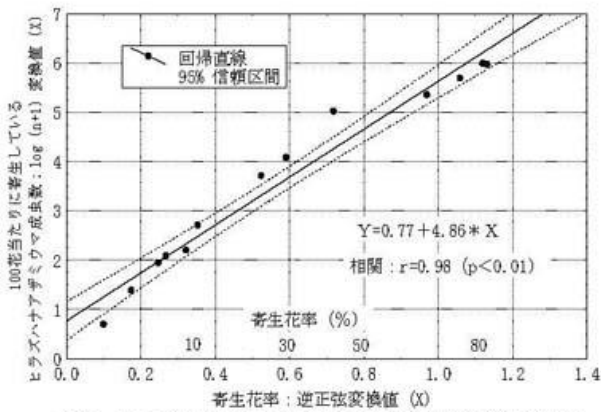


図1 ヒラズハナアザミウマ寄生花率と寄生成虫数との関係

図2 寄生花率と開花している100花当りに寄生しているヒラズハナアザミウマ成虫数との関係(2003年)

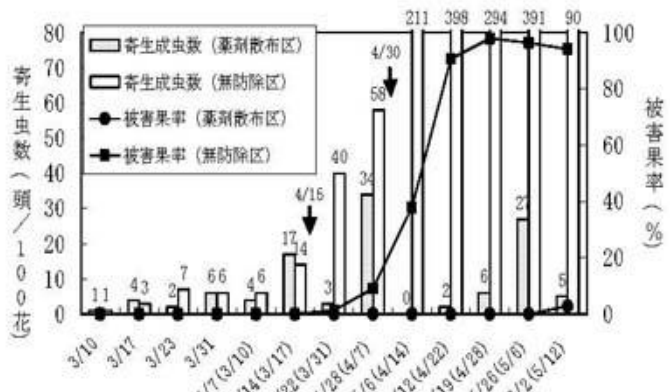


図3 要防除水準に基づいた薬剤散布区と無防除区の被害果(成熟果)率の推移(2004年)

- 注1) 棒グラフ上の数字は寄生成虫数を示す。
- 注2) 調査日横の () は調査した成熟果の開花時期を示す。
- 注3) 矢印は薬剤散布区の薬剤散布日を示す。
寄生成虫数が100花当たり10頭に達した時点で薬剤を散布した。
4/15にスピノサド水和剤(5000倍)、4/30にアクリナトリン水和剤(1000倍)を散布した。
- 注4) 両区とも品種は女峰で、ヒラズハナアザミウマが優占種(優占率89.5%)である。

[その他]

研究課題名 : 園芸作物における病害虫の総合防除技術の確立

予算区分 : 県単

研究期間 : 1998~2003年度

研究担当者 : 生咲 巖、藤本 伸、松本英治

発表論文等 : 藤本・松本(2003) 四国植物防疫研究 38:66(講要)